

德尊宮

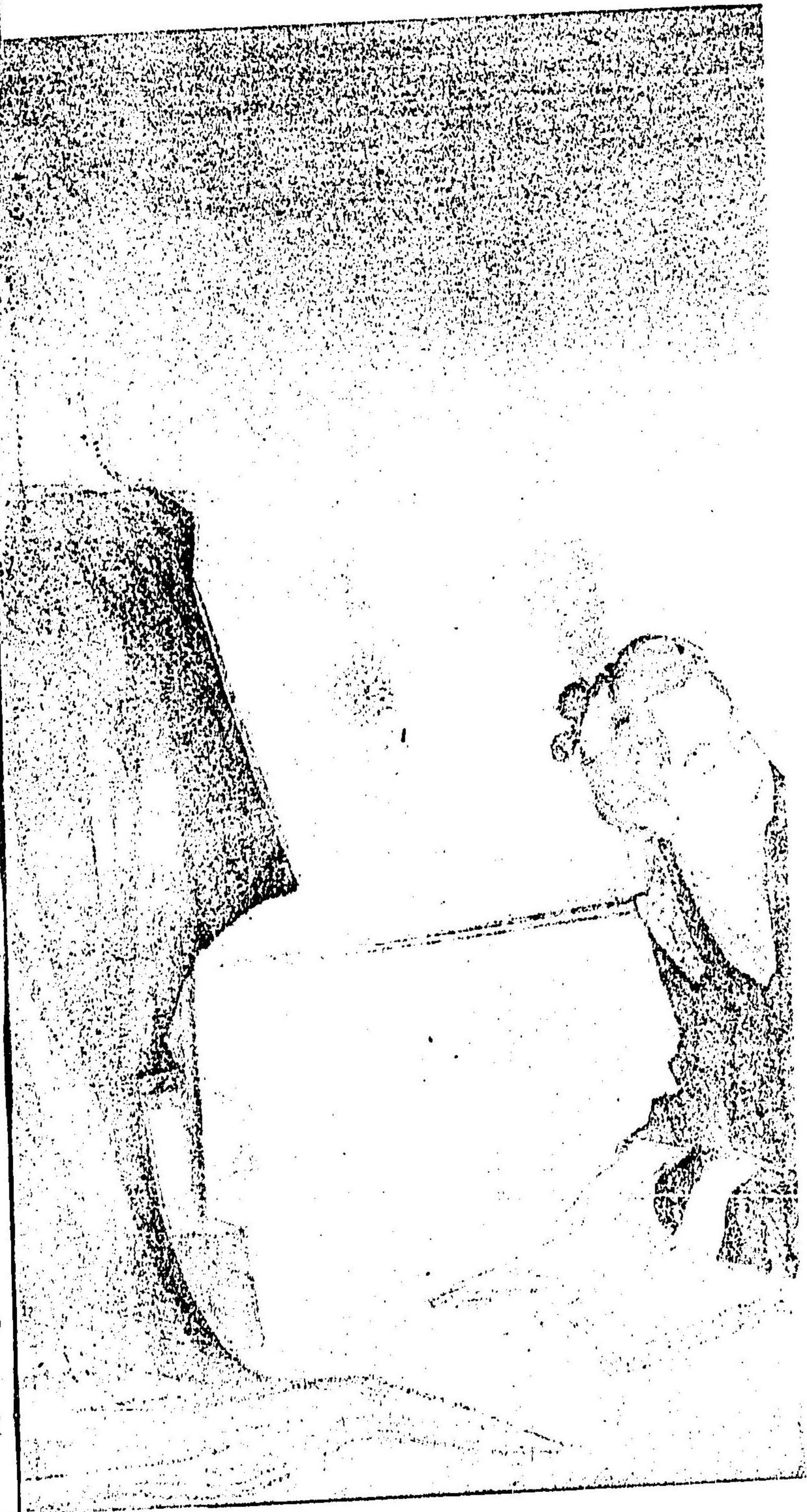
二宮尊德

190
414





一富士の山程思ひて芥子粒程成る。と云ふ諺も有れは
 人は成るべく大人物と爲らん事を心掛くべし。
 と爲るには如何にすべきかと云ふに學問も修めざるべ
 からず、技藝も習はざるべからず、才智も練らざるべから
 ずと雖猶更に重要なるは品性を養ふ事是なり。
 さて品性を養ふには如何にすべきかと云ふに父母の教
 も守らざるべからず、師の言行も見倣はざるべからず、交
 る友も擇まざるべからずと雖大人物の言行を知りて、
 れに見倣ふ事も又頗大切なり。大人物の言行は談話に
 ても聽かるれど、文章にて見るは文一入面白き者なり。
 家庭讀本は少年諸君が大人物の言行を知る一端にもと



少年諸君が學び難らざる人物を選び中にも倣ひ易き言
行を採り成るべく讀み易き文字を使ひ力めて解り易き
言葉を用ゐる殊に少年時代の生活を詳にし出來得るたけ
面白く綴り成したる書なれば少年諸君が座右の友とし
て日夕相親まれなは得る所蓋少からざるべし。
たゝ編者學淺く才足らず心はやれど筆先澁り諸君をし
て十分の満足を得しめざるを恨みとするのみ。

二宮尊徳

貧賤の家に生れ幼くして父を失ひか弱き腕に母子三人
を養ひ育てしは二宮尊徳なり。夜更け人靜まるをうか
ゞひ密かに書を繕いて早く人の道を悟りしは二宮尊徳
なり。暇を量つて荒地を耕し人の捨てたる苗を拾ひ僅
に得たる一俵の糶を本として遂に廢れし家を起したる
は二宮尊徳なり。懇なる頼み辭むに由なく家を棄て、
大家諸侯の困窮を濟ひ餓に迫れる衆民を救ひて身を顧
みさりしは二宮尊徳なり。
そも二宮尊徳は學問才智の衆に勝れたる者有るに非ざ
れども、しかも猶學問才智衆に勝れたる人の爲し能はざ
る所を爲して毫も其報を念はず名利富貴は浮べる雲と

見返らず、土地を興し民を救ふを己が任と覺悟し、一意業を執りて厭はず、専心事に従て倦まず、終始一貫、多年一日の如し。其至誠、天地に渡り、日月を貫くに非ずんば、蓋能く斯の如くなるを得んや。唯此至誠あり。故に能く百世萬民に父母の如く慕はれ、遂に神とし祀らるるに至れるなり。至誠の徳も亦大なるかな。茲に二宮尊徳先生の言行を傳へて、家庭讀本の第一編とす。豈故なきとせんや。

目 次

- 一、誕生……………五
- 二、父田地を賣りて藥禮とす……………九
- 三、草鞋を作つて酒を父にすゝむ……………二二ノ三
- 四、父の病死……………二六
- 五、幼兒を取り戻す……………二〇
- 六、山への往き來に大學を讀む……………二四
- 七、大神樂を欺く……………二七
- 八、土手普請に出づ……………三四
- 九、母に死なる……………三八ノ三
- 十、本を讀まんとして叱らる……………四四
- 十一、人知れず本を讀む……………四四

- 十二、貧しき者を助く。……………四九
- 十三、荒地を耕す。……………五五
- 十四、家を興す。……………五八
- 十五、服部家の興復を頼まる。……………六三
- 十六、服部家を再興す。……………六八
- 十七、櫻町の興復を命せらる。……………七三
- 十八、鳥山藩及細川藩の衰頽を興復す。……………七九
- 十九、小田原領内救済興復の事を命せらる。……………八三
- 二十、幕府に用ゐらる。……………八九
- 廿一、後死の譽。……………九五

目次

二宮尊徳



生

青葉山人著

二宮尊徳は天明七年七月二十三日相摸の國足柄山郡柏山村に生れ幼き時の名を金次郎と云へり父は利右衛門とて至りて堅氣の人なりき。金次郎の家祖父の代までは家計可なりに豊なりしが利右衛門隣みの心深くしてみたりに施しをなし、より家計次第に悪くなりて金次郎が生れたる頃は至りて貧乏になれり。るれに金次郎に續いて三郎左衛門富次郎と云ふ二人の弟さへ生れし

かは愈くらしむきにこまりたり。
 金次郎五歳の時大雨降り續きて幾日も止まらず村人が必
 死の防禦も其甲斐なく酒匂川の堤防一時に壊れて「あ
 れい。」と云ふ間もなく金次郎の家は押し流されぬ。親
 子五人辛うじて命だけは助かりたれど、はいるに家なく
 着るに着物もなくなりたる上に田畑も跡方なく押し流
 されて、まるを野原のやうになりたれば二親はしほし途
 方にくれたるが、やうやくに氣を取り直し形計の家を立
 て間に合ふたけの膳椀など親類縁者より借り集めて細
 き畑を立てにけり。
 さて田畑を其儘になし置きては之より後命を繋ぐよし
 もあらざれば出来るたけはおこしみると二親もろとも

朝早くより夕暮まで田畑に出で、かせけは金次郎は家
 に留守居して三郎左衛門と富次郎を子守し居たり。
 二親はかく精出して働きたれどもとより固り切つたる
 土地の事とてたやすくはほれず何を植ゑても能く育た
 ざれば愈貧窮になり夏來てもつる蚊帳なく冬になりて
 も着る布圍なく着物切れても繕ふすべなく垢つきても
 洗濯するに着換なし。かてを交せく三度の食事はな
 し居れど菜も碌々食はずして辛くも命を繋ぎたり。
 かゝる貧しき中にありても二親は金次郎兄弟を可愛が
 る事深く自分等は食はずとも金次郎等に食はせ自分等
 は着すとも金次郎等に着するやうにして大切に育てし
 かば子供等はいと健に育ちて金次郎も十許になりにけ

り。「御父様御母様」となじみ親みて、「はいく」と顔よく父母の云ふ事を聴き二親が、「金次郎にも三郎にも今に善い物を着せ、旨い物を食はする程に今少し辛抱してくれ。金次や三郎」と慰むれば、金次郎は「私は善い物を着たいとも思ひませんが、旨い物を食べたいとも思ひませんから、うんな事は心配する事はありませんよ。御父様私は早く大きくなつてね。御父様の御手傳を致したいと許思つてますよ。御母様」と答ふれば、「あ、金次郎は良い心掛を持つてるぞうぞ其心掛を忘れないでね。大きくなつたら一生懸命御父様の御手傳をして下さいよ」と勵ましつゝ、貧しき中にも楽しく暮らした

二、父田地を賣つて藥禮とす。

かくて二三年を過したるがふと父が風の心地とて打臥したるまゝ、頭上らず熱烈しく出て来て飯も碌々食はず日増に弱り行けは母は一方ならず心配し、「藥禮する錢もないのに。」と父が止むるをも聴かず、「それはあとで工夫がつかませうから。」と早速醫者を招きて診察を受け薬を貰ひ、母と金次郎とが朝夕心を盡し、骨身惜まず看病もしたる甲斐ありて、餘り長くもあらで癒りたるがさて困るは御藥禮なり。

「借りるにも貸手はなし。よし貸手ありても何時返すと云ふあてもないから借りる譯には行かない。さりとて賣るべき家財道具もないし、僅か許の田地は有るけれど

も之を賣つては、どうも御先祖に濟まない。之は、どうも
 たらよからう。」と案じ煩うたる末、妻とも相談し、「先祖
 には濟まないが世の義理は缺かれない。」と思ひ切つて
 田地を賣り拂ひたるに、金二兩を得しかば、「之で安心」と
 其儘それを懐にして病氣上りの體を杖に助けられなが
 ら醫者の家へと急ぎたり。
 さて醫者の家に行きて病氣の癒りたる禮を陳べ、「之を
 心許の御藥禮餘りに輕少なから御受取下され。」と差し
 出したるに醫者は眉打撃め、「之は飛んでもない事をな
 ざるゝ者かな。失禮ながら御前さんの苦みは疾と承知
 せる私なんぞ謝禮を貰はうと思ひませうぞ、之はまあさ
 うして御調へなされしか御差支ないならば伺ひたい者

ですぬ。」と云へば、利右衛門は面目なさうに頭を掻き
 「御不審なさるも御尤であります。貰は田地を賣つて參
 りましたので」と云ふを皆まで聞かず醫者は驚いて、「そ
 れは飛んでもない。私に義理を御立てなさる御心掛は
 善いが明日より御妻子を何として御育てなさる。私は
 御前様より藥禮を貰はぬからとて、くらせぬ身でもあり
 ませんのに、まあ之は此儘持ち歸られて、すぐと田地を買
 ひ戻しなさい。」「それでは私が心に濟みませぬ。」「いや
 く御前様がよこさまで心に濟まぬと云はるゝと同じ事
 で受取ては私が安じませぬ。餘り堅い事を云はずとさ
 あく早く持て歸られよ。」「でも」でも所ではありませ
 ん。御前様の御妻子が明日より困る此金を知りつゝ私

が貫はれよすか、まあ薬禮は御前様が福しくなつてから
澤山頂戴致しませう。」と情ある醫者の言葉に利右衛門
身に染みて有り難く背く力もなくなりたれど、さりどて
其儘も歸り兼ね、「それなら半分だけ暫く拜借致します」
と半分を無理に置き逃ぐるやうにして醫者の門を出で
ければ醫者は之を見送りて、「家富みながら碌々薬禮も
せぬ者が多い此世の中にさても珍しき堅氣の人よ。」と
譽め稱へて止まざりけり。
それとは知らぬ母と金次郎日暮れになりても父の歸ら
ぬは病氣上りの足元定まらずもしや過ちなど有りはせ
ぬかと心配する母の言葉に、「御迎に行つて見ませう。」
と駈け出す金次郎が門を出ると父はさも嬉しさうに打

笑ひ両手をふりながら歸り來りて金次郎の頭を撫で、「
金次喜べ。御醫者様が無理に御戻しなしたから御借り
申して來たよ。もう心配する事はない。腹も減させな
いあゝ有り難い御醫者様だ」と共に家にはいり此由物
語れば母も嬉し涙に咽び何とも分かぬ三郎左衛門まで
嬉しがつて跳ね廻れば富次郎も母の乳房を揉みながら
の高笑ひ暫しは貧も忘れけり。
三 草鞋を作つて酒を父にすゝむ。
貧乏暇なしに長き月日も短く暮して金次郎も何時しか
十二歳となりぬ。其頃廢れし田畑もやうくおこした
れど父は病後の力弱く母は手足に纏ふ幼兒ありて思ふ
やうにも働けぬは取る物實も少くて三度の食さへ丁度

に口に上らず。父は性來好める酒も飲み兼ねて、「なあにさう飲みたいとも思はない」とは云ひながらも手持無沙汰に寂しけなる顔を見る毎に金次郎は氣の毒に堪えず、さうかして酒を上げたいな」と思ひ込みそれより一心に草鞋作りを習ひ畑かせぎの暇々草鞋を作りそれを賣つて一合許の酒を買ひて父にすゝめたるにさも嬉しさに一口飲んで額を撫で、「金次はまあさうして酒を買つた。草鞋を作つて……それを賣つて……あゝ有り難い。このやうな孝行な子供を貧故に苦まする此親が重々濟まないや金次許してくれ」と拜まぬ許に涙ぐむを聞いて金次郎は悲しくなり、「たつた一合の酒に此様な事云はるゝ御父様の心思へは悔しいとも悲しい

とも限りない。あッ早く大きくなつて精限り根限り働いて御父様にも御母様にも安心させたい者たど。」小さき胸の一杯になりて俯けば涙はしなくはふり落つ。母は三郎左衛門に向ひ、「三郎や御前もな御兄様にな」とあと口でもりて物云はねば三郎も泣き富次郎も泣く。時ならぬ時雨に親子五人袖をしほりぬ。父はやがて涙を拭ひ、「あゝ悪かつた。切角喜ばせやうと思つて買つて來た酒それを飲んで涙こぼしては濟まなかつた。さあ飲まう。金次御酌をせあゝ旨い旨い」と一合の酒に快く酔ひておどけなご語り出しければ兄弟も笑ひ興じ

父の喜ぶ顔

父にすゝめ、
毎晩は
来つ
は葉を打ち草鞋
を作り酒を買ひ



て面白
く一夜
を過し
たり。
それより金次郎
は朝となく夜と



を見るを何よりの樂みとせり。

四 父の病死

やがて金次郎も十四歳となりて、小腕ながらも何かにと
手傳する健氣さに父も喜び勇んで立ち働さ、「貧乏も苦
勞も今暫しの間じや」と互に樂しく暮す中、夏の末に至
り父疲の氣味とて寝ねしより頭上らずたゞ弱りに弱り
行けば、こは打棄て置かれずと家財道具は云ふまでもな
く、日畑までも賣代なして藥代や診察料となし、自分等は
粥を啜りながら父には旨き物をすゝめ、臉も合さず介抱
したれども更に其甲斐なく、次第に肉落ち骨高くなりけ
れば、金次郎母子身も世もあらぬ思ひ神に祈り佛に願

ひてひたすら平癒を願ひしも、神も佛も見棄てしか今は
飯も食はず藥も飲まずなりにけり。
父はととも助からぬと覺悟して、金次郎を枕元近く呼び
寄せ、「金次や、一日も早く人並々のくらしゝて、長々苦勞
を掛けた御前にも樂させやうと思ふ中、こんな病氣に罹
り御母様さんや御前が心盡しの看病も其甲斐なく、かう
弱り切つてはととも助からない。死ぬのも運命だから
仕方がないどあきらめらるが、あきらめてもあきらめられ
ないのは御母様や御前達を残して逝く事だ、あゝ金次や
御父様が亡くなつた後は、よく御母様に孝行し、力の限働
いて家を興してくれや頼むぞ。」と息も絶えくゞに云ふ
を聞いて金次郎悲しさを胸にこみ上げて涙は眼一杯にな

を見るを何よりの樂みとせり。

四 父の病死

やがて金次郎も十四歳となりて、小腕ながらも何かにと
手傳する健氣さに父も喜び勇んで立ち働き、「貧乏も苦
勞も今暫しの間じや」と互に樂しく暮す中夏の末に至
り父疲の氣味とて寝ねしより頭上らずたゞ弱りに弱り
行けばこは打棄て置かれずと家財道具は云ふまでもな
く日畑までも賣代なして藥代や診察料となし自分等は
粥を啜りながら父には旨き物をすゝめ、險も合さず介抱
したれども更に其甲斐なく次第に肉落ち骨高くなりけ
れば金次郎母子身も世もあられぬ思ひ神に祈り佛に願

ひてひたすら平癒を願ひしも神も佛も見棄てしか今は
飯も食はず藥も飲まざるにけり。
父はとて助からぬと覺悟して金次郎を枕元近く呼び
寄せ、「金次や一日も早く人並々のくらしゝて長々苦勞
を掛けた御前にも樂させやうと思ふ中こんな病氣に罹
り御母様さんや御前が心盡しの看病も其甲斐なくかう
弱り切つてはとて助からない。死ぬのも運命だから
仕方がないどあきらめらるが、あきらめてもあきらめられ
ないのは御母様や御前達を残して逝く事たあ、金次や
御父様が亡くなつた後はよく御母様に孝行し力の限働
いて家を興してくれや頼むぞ。」と息も絶えぐに云ふ
を聞いて金次郎悲しさ胸にこみ上げて涙は眼一杯にな

りたれどきつと心を取り直しさあらぬ體に笑ひながら
 「何を云ふの御父様死ぬの生きるのなと云ふ所では有り
 ませんよ。大層善くなつたと御醫者様も仰せられまし
 た。そんな氣弱い事云うては體の爲になりません。風
 など引いては大變だからさあ横になつて御寢み。」と布
 團を掛けてやりながらもしや之が遺言なと云ふ者にな
 りはせぬかと思ふに腸も斷る、許悲しくて落る涙は止
 らず御母様はと見れば聲こる立てね泣き伏して正體も
 なし。

三郎左衛門も寢富次郎も寢家内ひつそりとして夜もや
 うく更に更け行けば隙漏る風は身に染み渡り差し入る
 月影も哀れなり。何地行くらん雁の二聲三聲心細くも

母と金次郎は父の枕邊に寄り添へて靜かに其息ざしを
 うかがふに次第に細くなり行く様子なれば、「御母様御
 悪いやうぞすね。」ほんにさうたね早く夜が明けてくれ
 へは善いな。」と云ふ聲の耳に入りてや目を覺まし、「水
 ……」と云ふ故金次郎手早く薬を飲ませたるに吐きもど
 すや否兩手にて胸搔きむしる。苦しさを察しな
 がら如何にとする由なくてうろくする中弱り果て
 へや、「金次郎や三郎や」と妻子の名をば呼び返し呼び
 返し次第に細り行く聲の止ると共に息絶えぬ。「御父様」
 「利右衛門様」「御父様」「御父様」と弟どもまで目を覺し
 親子四人前後左右に取り縋りて呼べども呼べども答な
 く熱き涙にあひせられながら冷くなり行く許なり。

母と金次郎は泣くく其由親類縁者に云ひ遣りて、うこ
 らかたづけなごする中に親類縁者も駈けつけ來りて何
 くれと助け合ひて葬式を濟まし後のくらじに幼兒あつ
 ては困るべしとて富次郎をば母の實家に連れ行きて育
 つることゝなせり。

五、幼兒を取戻す。

「さあ何時まで泣いて居つても仕方がないから涙を拭
 いて一生懸命かせぎませう。金次や。二ほんにさうです
 ね。」と母もろとも晝は田畑に出で、終日かせぎ夜はよ
 もすがら何時もの通草鞋を作り暇ある折々は人にも使
 はれなごして一日二日と暮したり。
 然るに母が毎晩々々眠らぬ様子なるにもしや體の加減

の悪さにはあらずや。」と金次郎心配に堪えず或晩起き
 直りて、「御母様はなぜ御寝みなさらないの御加減でも
 悪いのですか。」と尋ねれば母もやをら起き直り、「おや
 金次郎は起きて居たのか。加減も何も悪くはないよ。
 あまり乳が張つて痛む故それで眠られないのだから心
 配しないぞやすんでおくれ。」と口には立派に云ふもの
 争はれぬ涙のはふり落つるは夜目にもうれと見ゆる
 を金次郎はうれと察し、「御母さんは富次郎を御案じな
 ざるのでせう。うの事なら御心配なさる事はありませ
 んよ。何も富次郎一人殖えたからとて、うんなに困る事
 もありませんまい。少しは困つても小さいのを遠く離し
 て置くのは私でさへ不便でなりませんから御母様の

御心配なさるのも御尤の次第富次郎もさぞ御母さん御
 母さんと云つて泣いて居ませう。明日から私が薪を採
 つて御助けしますから富次郎を御戻しなさい。」と母を
 思ひ弟を憐む優しき心に母も暫しは嬉し涙にかきくれ
 しが「うれなら行つて来るはとによく留守して。」と出
 て行かんとすれば金次郎は「まあなんぞです。今御出でな
 さるのもう遅くなつて風も強いから今夜は御止しなさ
 い。夜が明けたら私が背負つて来ますから。」と云うを
 遮りて「夜が更けやうが風が寒からうがなんの苦しい
 事が有らうぞや。御前さへ明日から薪を採つてくれる
 と云ふに。」と無理に出で行きたれば金次郎は「うんな
 ら静かに行つて御出でなさい。」と後見送つて床に座り

たるまゝ寝もやらず、「あゝ御母様はあゝも兄弟を可愛
 がつて下さるのか。」と有り難さ身に染みて、「あゝ早く
 大きくなつて御恩を返したいな。」と其まゝ待つ程に夜
 明け方喜ぶ富次郎を背負ひ、「そろ家に来た。」と喜び
 つゝ母歸り来りたれば金次郎は戸口に迎へて、「おゝ歸
 つたか富次郎さあ下りてく。」とさも嬉しさうに富次
 郎を下し親子四人富次郎を中に取り圍んで喜ぶ事限り
 なし。
 富次郎を戻したるは嬉しけれと之がため一人たけ口の
 殖えたれば油断しては饑ゑる許。」と母が朝早くよりか
 せぎに出づれば金次郎も共に起き出で、山に入り小腕
 ながらあなたを力に薪とり把ねて背負ふて家に積み重

ね又山に入りて薪を探り背負ふて家に歸り、かくして二
三度行き返りする中に日も暮るれば夕飯後より草鞋を
作りなごしてくらしけり。

金次郎が此有様を見聞く人は誰一人感心せぬ者はなく
「うれはさうと彼の川向ひの金次郎様は感心な者じや
ありませんかね。」さうく御母さん安心させたや二人
の弟不便やなと思ふ心の優しい事ね。「ほんとうにね。
十四の子供が薪を採つたり草鞋を作つたりして難義と
も苦勞とも思はないで能くまあねいかわいさうにね。」
と隣近所の御婆様達が御茶飲み話にも涙を落しけり。

六 山への往き來に大學を讀む。

金次郎幼き時より手習ひ本讀む事を好みしが貧乏の悲

しには寺小屋に行く事も叶はずさりとて字を書く事
も本を讀む事も知らぬは残念の事なりと小兒心にも悔
しがり、「解らぬ所は人にも聽いて覚えやう先獨でやつ
て見やう。」と僅の暇を大切に「いろは」より始めて庭
訓往來實語教などを讀み覚えやがて大學をも讀み得る
やうになり熱心の有り難さに意味さへ大概は解りしか
は面白味も出て來て、「如何にもして人の讀む位の一通
の本を讀んで見たい。」と樂める甲斐もなく父が病死よ
り愈暇なき身となりて本讀む事などは夢にも叶はぬ事
となれり。

時に金次郎山への往き來に思ふやう、「かう山へ往き來
する途中たゞ歩くものまらぬ事だ、何を旨い工夫がな

いかしらん。」と暫く考へ、さうく有つたく彼の好きなき大學を讀みながら歩かう。さうすれば本の復習にもなるし本に氣を取られて遠き路を歩くにも退屈しないし重いのも忘れる、之が何時ぞや御師匠様が御仰た一舉兩得と云ふ者たらう、ほんに考へれば良い工夫も出る者た、旨い旨い。」と小躍して打喜び其翌日よりは大學を両手に開き高らかに讀みながら山へ往き來たり。或日の事軍事にも飽きて今しも金次郎の還る道側に休み居る一群の小兒あり、何を云ふにも十を前後の腕白盛夢中になつて遊ぶを一日の仕事と心得た、を踏んで父母を困らするを功名と覺にたる連中なれば金次郎が

高らかに本を讀み行くを見て可笑しくも不審でたまらず頬に鼻鬚の走つたるも知らず大切な臍の出しやはるにも御かまひなく「おい、皆來い。」彼の様を見ろ」「乞食た乞食た。」いや、狂た乞食が本を讀むなんて有る者か。「讀み聲が可笑しいぞ。」あれでも返すふりするから可笑いや。「さうしても狂た。」あはう」「乞食」「やあ」「やあ」と罵り噪ぐを金次郎は耳に入らぬか又聞こえても心に掛けぬか側目も振らず顔色も變へず止りもせず急ぎもせず悠々として讀みながら歩み行く。なにがな事あれかしなんのかんのと返す言葉に花が咲いて喧嘩になつたらそれこそおもしろいと多勢を頼みに鳥の寄合宜しくと云ふ様に「やいやい」噪ぎ立てし

も、金次郎が返し言もせず、さりとて憶したる氣色もなく平氣に本を讀んで通らるゝに、切角の氣勢も挫かれては、んやり見送る姿の可笑しとも笑止なり。

七 大神樂を欺く

さて其年も暮れて、明れば金次郎十五の春、當前ならば新しき着物に身を飾り、雑煮の餅に腹膨らして、風揚げ獨樂廻しに忙はしかるべきに、神様と子供共に許と、やつとつさし餅もなくなり、親子四人額を集め、爐を圍んで居たる三日の晝過ぎ、大鼓や笛の鳴音賑しく聞こゆるは、年始を祝ふ大神樂なり。

母は早くも之を聞きつけて、「金次や大神樂の音ではないか。」と云ふと、金次郎耳傾けて、「さうです、ね、さうしま

せう。「舞はせると百文くれなければならぬが、錢は一文もなし、舞はせないでは正月でもあるのに、隣近所の手前も面目もない。之は困つた。どうしやうな。」と口説きながら、若や見つかる事もやと、其處ら捜し始むれば、金次郎も同じ心配に廣くも有らぬ家の中を隅より隅まで捜したれど、鏝一文も出て來らばこそ。鼠の糞を許し、轉け出れば、母はあきれ、金次郎は途方にくれて尻餅つく。其間に大神樂は遠慮なく近寄り來る。

金次郎起き上つて、つこと笑ひ、「御母様御母様、旨い工夫が有りますよ。あのね、戸をしめてね。さうして黙つ



過ぎて行くに違ひ
 ありませんよ。さ
 うござい。御母
 様。」と云ふと母も
 可笑しさをこらさ
 ず、「さうく」と
 戸をしめにかゝる
 と金次郎は三郎左
 衛門を瞞しすかし



て居ませう。すると畑にでも行つたのたと思つて通り

て共に隅の方にかたまりぬ。其處へ母も寄り添へて富次郎に乳を飲ます。目と目で「來たく、聲立てないやうに。」と知らずの間もなく大鼓の音に笛の聲拍子可笑しく足踏みならして舞ひ込みたれど、かたりとも音せねば、「居ないく、駄目たく」「畑へでも行つたたらう。」「あなた今時分畑へ行くな」と云ふ阿房が有る者か。「さあ隣だ。」と云ひ放つて隣に行く。隣より其隣其隣より又其隣と其鳴音も遠くなりたる頃「やれやれ心配たつた。」と溜息をつく母の顔を眺めて笑ひながら「ほんに心配でしたね。富次郎が噪ぎさうになつた時は冷

汗を流しましたよ。」と云ふと母も笑ひながら「ほんに富次郎には困つてしまつたよ。泣き出さうとするから乳を含ますと今度は嬉しがつて笑ひ出さうとするあゝ飛んでもない胸を痛めた。」と云ひながら戸を明けにかゝりたり。

八 土手普請に出づ、

柏山村を流るゝ酒匂川と云ふは富士山の麓より流れ小田原に到りて海に入る川なるが大雨毎に水嵩まさりて土手を破り田畑を流す事毎年の如くなれば領主は領分中へ命じ一軒より一人づゝ出さしめて土手普請をなさしめたり。今年も其役ありて金次郎も出でたれど年も行かず力も弱き故一人前の働出來ず何となく氣にかゝ

り仕事しまつて家に歸つても、「御母様只今歸りました
 。」と云つた切り椽には腰打掛けて上らうともせず、は
 んやり眺め居る故母は心配して、「今日はくたびれたら
 うね。さあ草鞋を脱いで足を洗つて御上り御汁も暖め
 て居いたから。」と云ふ。云はれても金次郎何時になく
 「はい只今上ります。」と許云ふて上らねば母は猶々心
 配して、「何か加減でも悪いのか金次郎。」と顔を覗く。顔
 覗かれて金次郎、「あゝ御母様に心配掛けては悪かつた。
 とにかく上らう。」と思ひ直して草鞋を脱き足を洗つて
 座敷に上る。

座敷に上りて爐縁には寄つたが飯を食はんともせで母
 に向て云ふやう、「御母様今日は土手普請には行きまし

たがね。私は年も行かないし力も弱いからと思つて一
 生懸命かせぎましたがね、さうも一人前の働きが出来な
 かつたもんだからみんなに濟まないし、氣持も悪いし、そ
 れでどうしたらよからうとかう思つてね。「心配して居
 るんですけどがね。」と云へば母も「さうさね、どうしたら可
 いたらうね。しかし金次や、御前は年も行かないし力も
 弱い。それでとても一人前の働きも出来ない」と云ふ事
 は誰も承知して居るのだから勘辨してくれませんか。
 「それは勘辨してくれませんが、誰も何とも云ひません
 がね。誰に何とも云はれないだけ、私は心に濟まないん
 です。かうして一の家を立て、居ながらみんなして同
 じにやるべき仕事に私許一人前の仕事しかいでは本當

に濟みません。なにか旨い工夫か。」と両手を膝の上に
 組んでちつと考へ込むと母も「それもさうさね。」と思
 案にくる。様子富次郎は乳房に縋りて寝れば三郎左衛
 門も大人しく火にあたり居る。家の中はひつとりとし
 て湯の沸く音のみ高し。
 「御母様旨い事を考へつきましたよ。」と金次郎急に顔
 を上げていつこと笑ひはかちも嬉しさうに。「さうかうれ
 は良い。旨い事てさういふの御聞かせな。」とあたまつ
 て見て御出でなさい。心配しないでも御母様私はちや
 んと旨い事をやつて御目に掛けますから。」と今までの
 心配顔は何處へやりしや元氣よく夕飯を食べ了りぬ。
 母は後仕舞をなし針仕事しなから金次郎は何をするか

と見てあるに何時もの様に草鞋を作り始めたるが寝る
 頃になりても寝やうともせず一心不乱に草鞋を作り居
 る故母は「さあ金次郎寝やうぢやないか。大分遅くな
 つたよ。」と云ふけれども金次郎は「もう少し」と云
 ひながら五六足の草鞋を作り上げ束ねて片隅に置いて
 爐の火をかきおこして手を焙りながら「あの草鞋をあ
 の草鞋を持って行つてね明日皆さんに上げるのですよ。
 そして私の力の足りない所を補ふのですよ旨い考でせ
 う。御母様」と云へば母は大に喜んで「それはまあ善
 い思付たね。しかし御前はつらからうよ。晝は一日か
 せいぞ来て夜は又遅くまで草鞋作りでは」「いやつらく
 も何も有りませんよ。之を力たしにする事が出来るよ。」

思ふと氣が晴々するやうですさあ寢ませう。」と寢ると其儘高軒枕はづすも知らざりけり。翌朝は何時もより早く起き手早く仕度して仕事場に行き外の人の來るのを待て、「さあ草鞋を一足づゝ取つて下さい。」と云へば人々は不思議さうな顔つきして、「之は一體何んです。金次さんから貰ふ譯がない。之は御前さん穿きなさい。」とて受取らねば金次郎は、「私が働きたやうが足りないので皆様の御厄介に許りますからほんの心許に作つて上るのですからさうぞ取つて下さい。」と無理々々手に渡せば、「それでは折角の思召だから貰つて置ませう。さあ太兵衛様も取りなさい。權助さんも。」と一足づゝ取つて穿きにけり。

此日を始として金次郎は毎朝草鞋を持って來て人々に遣りしかば人々は云ひ合したるやうに金次郎の仕事を手助けするやうなるべく難義な仕事をさせぬやうに計ひて寄るとさはると金次郎の噂なり。利右衛門様が生きて居つたらそんなに喜ぶことであらふぞ。「さうですなあ。いふ子は屹度出世しますせほんに御母様は仕合た。」と涙ぐむ人もあれば、「あゝ私も彼の様な子が欲しい者だ家の野郎などは父母の云ふ事を聽かぬ許かなんのかんのと働く事を厭がつて錢米盗み出しての氣儘遊び金次郎様の爪でも煎じて飲ませたら癒る者か。」と金次郎に引き較べて我が子を歎く人もあり。

金次郎はかゝる噂を聞くにつけ、猶更に精出して働いたる上、人の休む時にも休まずなるべく人並々の仕事せんと骨身惜まず立働さければ、人々も之に勵されて一生懸命に働きたり。

九、母に死なる。

杖とも柱とも頼みし父の亡くなりしより、只さへ貧窮なる金次郎一家は益貧窮になりて、田も畑もはや人手に渡り、残るはあはら家只一なり。されど金次郎少しも弱らば、人に傭はれては賃銭を取り、薪を採り草鞋を作り、それを賣代なしては、米代に充れば、母も之に力を得て、人の洗濯や絲繰りなとして、辛くも細き煙を立て居る中に、其年もはかなく暮れて、金次郎十六歳

となりぬ。

金次郎は指折り數へて成人に近づきたるを喜び、今に田畑を買ひ戻して、御母様にも安心させん者と、此一をは又なき樂として、猶も勵み勉むる中、母病に罹りて打臥しぬ。只ならぬ様子なれば、金次郎一方ならず驚き、手に手を盡して看病したれども、日増に弱り行きて、終に亡くなりぬ。金次郎は母の死骸に取り纏り、「御父様も亡くなつたのに、御母様までさうなつては、明日から私は何を樂みに働かませうぞ、今に身上を立て直し、地の下の御父様にも喜ばせ申し、御母様も慰め申さうと、たゞそれ許を樂みにして働いて來ましたのに、今此有様、御母様息吹き返して下さいよ。御母様」と聲も惜まず泣きけるも、理せめて哀

なり。

やがての程に親類縁者集りて、金次郎兄弟を慰め、形許なる葬式を済まし、さて二三日ありて、「子供共許置く譯に行かねば」とて親類縁者共相談して、三郎左衛門と富次郎とは母の實家にて引き取る事となじ、金次郎は伯父萬兵衛の家にて引き取る事となしぬ。

「己は家を離れるのは厭た、兄様と一所に居たいよ。」と、ひつがる富次郎を金次郎はなため、「三郎も富次郎もね、よく大人しくして、伯父様の云ふ事を聴くのですぞ。云ふ事聴かないで、大人しくしないで出されると行き所がないからね。」と、叮嚀に云ひ聞かすれば、三郎左衛門は聲うるませながら、「はい云ふ事を聞いて、大人しくして居ま

すからね。兄様早く家に返して御くれよ。」と、富次郎も行くの。と手に手をとりて出て行くを、金次郎は門に立て見送れば、三郎左衛門と富次郎は振り返り振り返りながら歩み行きたるが、やがて曲路にはいりて姿見えなくなりけり。

金次郎急に悲しくなつて涙も出しかど、人の手前悪しと袖にて拭き、さあらぬ體にて家に入れば、「さあ今度は金次郎の番だ、家の中をかたつけて」と急がるゝに暫しは弟の事も打忘れて、そちこちと取りかたつけ、両親の位牌と文庫箱とを背負ひ、「さあ宜しう御座ります、伯父

なつかしく暫し
は垣に寄り掛り
て眺むるを、「さ
あ行けく愚痴
々々して居ると
日が暮れるぞ。」
と伯父の萬兵衛
に連れられて心
ならずも我が家



様ぞうを連れて
行つて下さい。
と家は出た者の、
さすが我が家の



を振り棄て、伯父の家へと急ぎけり。

十、本を讀まんとして叱らる。

金次郎萬兵衛の家に取り取られしより、「それ草を刈れ、それ畑を掘れ、なたそんな掘り方は明日は田を掘るのたぞ、暇が有つたら山に行つて柴を探つて來い。」と朝より晩まで昨日も今日も暇なしに追ひ使はれ叱りつけらるれど元來すなほなる金次郎まして居候の身のいなやを云ふべきにも有らねばたゞ「はいく」と立働くに、心にさへも暇なくて晝は何とも思はぬが夜に入りては居馴ぬ人の家の窮屈さへあるに父の事母の事はては

別れし弟共の事まで思ひ出で、寝られぬ事のみぞ多かりける。

「それはさうと、家を興すにはさうしたらよからう。先錢を溜めるのも大事だがいくら錢許溜めたからとて、字の讀やうも知らない物の道理も解らないやうでは困る人と生れたからには物の道理や文字の讀みやう位は知つてなければならぬ。それには本を讀むのが大切な」と考へて祭の時小遣とて貰ひたる錢のあるを幸町に行きて二三冊の本を買ひ求めたり。

先夕方畑より歸り來りて夕飯を食ひ終ると、すぐ人は爐縁を圍んぞおどけ話をこして笑ひ興するを耳にも入れず、急ぎ部屋に引込んで本を見る嬉しさ晝の疲も打忘れ

て假名を使ひて讀み行くに、「金次郎金次郎。」と伯父に呼ばれ、何事ならんと伯父の前に手をついて、「何の御用。」と云へば伯父は眼を丸くし、青筋引き立て、たみ聲鋭く、「何をして居た金次郎」と云ふ。金次郎は恐るく、「本を讀んで居りました。」と答ふるに伯父は聲荒立て、「何、本を讀んでたと随分安心な者だな。着せられて、食はせられて、其上油まで使ふのは、餘計な事ではないか。御前の細腕を働いたとて何にもなりはしないせ、小間つしやくれの横着物め。」と叱りつけられて、金次郎は無念やる方なく、胸はつまり、頭は裂けん許になりたれど、ちつと鎖めて、「眞に悪う御座いました。すぐと止めますから御免なして下さい。」と云うて部屋に入りて燈を消し

其儘其處に泣き倒れて前後正體もなし、漸く我に歸つて居直れば、部屋は眞暗やぶながら月の光、板戸の隙間より漏れて、僅に部屋を照せり、金次郎つくつく思ふやう。「あんまりな伯父さんではないか、如何に御厄介になればとて少し許の油をともしたとて疵になる程の身上でもあるまいに、しかしさうかも知れないな。着せて食はせて、其上油まで使はれては困るたらう伯父さんの憤らるゝも無理ではあるまい。して見れば、己が怨むのが悪い。それでは本を讀む事は出来ないのか。あゝ人の家に居て厄介になる程つらい事はない。あゝ心細い、御父様も御達者なり、御母様も御丈夫で在らして家に居つたら、こんなつらい目にも逢ふまい者を何

故御父様も御母様も死なれたのか。あゝ己も生きてつ
 まらぬ月日を送るよりもいつその事死んで御父様御母
 様の御側に行かうかな。たがしかしさうしたら三郎左
 衛門や富次郎がどんなに悲しむか知れないな。して又
 御母様が亡くならるゝ時御父様の御しやつた事を忘れ
 ないで家を興してくれろと云はれた事は、いまに耳に残
 つて居る。死ぬ譯にも行かない。あゝ御父様御母様今
 頃は何處に何して御出でなさるやら三郎左衛門富次郎
 は今頃は寝たかな。」と父母を慕ひ弟を案じてあまりの
 切なさで慰む事もやど、そつと戸を開け庭に出で、眺む
 れは鏡の如き月影に父母兄弟の顔もうつるやうの心地
 して、我にもあらずみとれ居るに虫の鳴く音も哀に悲し

う聞きなされて堪え難き思なり。又部屋に入りて力無
 げに床のべそ寝まんとすれば人は寝静まりて軒の聲の
 み響き渡れば時を得顔か鼠共さゆうくかたぐし馳せ
 歩くを聞くにも、「彼等は親子兄弟打揃うて居るたらう
 な。」といとゞ我が身の心細く膝を抱いて寝たれども更
 け渡る夜寒の身に染みて眠らるべくも泣く涙着物の襟
 を濡らしけり。
 歎けはとて悲しめはとてせんやうもなき金次郎、「是非
 もない時節を待つより外はない。」とあきらめて面白か
 らぬ日をは送りけり。何時をやら山よりの歸りに負ひた
 る薪の餘りに重ければちと休まんととある木の根に腰
 打かけ汗を拭さく眺むれば秋の日和の麗らかに野邊

には桔梗刈萱女郎花など一面に咲き亂れ流るゝ小川の水さへに清し。川のはとり少し許の處荒れては居れど誰が落せし種子より萌に出しや時も知らず咲く菜花見るより金次郎小膝を打ち「之は旨い良い所を見付けた。此處を堀つて畑として菜種を蒔いたら五六升の菜種は屹度出来る其菜種を油屋に持つて行けば油と取り換ゆる事が出来る。其油で本を讀むに伯父様もよもや御憤りはなさるまい。之は良い所を見付た。旨い工夫が付いた。」と非常に喜んで家に歸り、それより暇の有る度毎に其處を堀り少し許の菜種を蒔いて來春を待ちける心の程こそ至勝なれ。

十一、人知れず本を讀む。

とかくする程に其年も暮れて金次郎十七の春になり蒔きし菜種子はいとよく育ちて見事に花も咲きやがて實もなりしかば喜び勇んで刈り取りて種子をこき落したるに嬉しや五六升の種子を得たり。金次郎は早速之を携へて油屋に行き油と取り換へ來り夜なく本を讀んで樂みけり。之を見付けたる萬兵衛又もや憤り出し金次郎を呼び付け「これ金次郎御前はそんなに本を讀んで何する積か。まさかに學者にもなればしまい。百姓の子が學者になりたいなどは御空に梯子ちと見當が違ふせ。自分の油で自分が本を讀むのたから可いと思ふか知らぬが居候の身分でさう勝手な事が出来る者でない。生意氣な。本を讀む暇が有る



なら細でも絢へ。」ときせるで爐縁をたゝく權幕の恐し
 さに金次郎あきれ返りて伯父の顔を見詰むれば、「なん
 た己の云ふ事が氣に食はないのか。氣に食はなければ
 勝手にするがよい。」と睨み付けられて金次郎は俯きな
 がら頭聲にて、「いやさうして氣になさ掛けるもんです
 か。本を讀みたい讀みたいと思ふ無分別から出た事故
 さうか御許しなして下さい。もう本讀む事なさは止し
 て每晚細を絢へますから。」と詫びて我が部屋に入り、「
 何もかも人に厄介になり居る身分では仕方がない。さ
 あ細でも絢へやう。」と健氣にもあきらめて夜遅きまで
 細を絢へてさて床に入りたり。
 床には入りたるが本を讀まぬ事の如何にも残念にて眠

られず、「どうかして讀む工夫がないか知らん。」と暫く考へて「よし」と獨言つながら靜かに起きて帶をしめ手搜りに燧石を取り火をあんどんに移して机に向ひしが燈の光あたりに通る故之ではならぬと再困りたり。暫く考へにこくしながら着物を一枚脱いであんどんに掛けたるに光は少しもあたりに漏れず本を照して反て明かなり。「旨い」と金次郎机に向ひ襟搔き合して本を讀む。風吹き入りても寒しとも思はず夜深けてもねむたしとも思はず瞬もせず讀みもて行くに今は人々寢静まりて咎むる人もあらざれば心安く面白き事限りなし。思はず時を過して一番鳥の鳴くに驚き「明日のかせぎにねむけなごしては困ると。」本を閉ち燈を消

して寐たるに満足したと安心と夜晝の疲も一時に出で來で前後も知らず寐入りたり。翌朝起きて昨夜の事を思ふに實に心持よくそれよりは毎日々々晝は畑掘り薪採り夜は夜もすがら細絢ひ草鞋作りさて夜中より起きては人知れず本を讀みつゝ一二年の後は一通の書物を讀み終りたり。十二、貧しき者を助く。或日金次郎一日の暇を得てしかば久々にて墓参りもし、弟ごもをも見舞はんと思ひ立ち朝早くより家を出で先墓に到り見るに新に立てる二の石塔には父母の法名刻みありて、あたりには生ひ繁れる草も深し。金次郎は先草を抜き取り倒れたる石塔を起しなごして町噂に掃除

をなし枯れ果てたる花を抜き取りて花竹に水を入れ持ち來れる花をさし線香をともしさて改めて手を合せて二親の墓を拜み、やをら塵打拂ひて立ち上り箒を携へ桶を提げ名残惜けに見返りつゝ、寺に戻り和尙に逢ひて心許の布施を出し懇に親が回向を頼み早く弟共の顔を見んものど急ぎ寺の門をば出でにけり。

それとは知らぬ三郎左衛門と富次郎道はたの堀に入りて魚取りに餘念もなかりし所に、「これく何故其處の魚を取るか。」と大聲に怒鳴る者あり。驚いて見れば吾が兄なるより嬉しさの餘網もふても投げ棄て、「兄様」

「よう来て下すつたね。」と両方より取り纏るを金次郎は両腕に抱い込みて見上げ見下す顔と顔暫しは言葉なか

りけり

やがて金次郎は、「さあ家に行かう。」と二人の弟を先立て、母の賢家に行き弟どもが世話になれる禮なと陳べ買つて來れる土産を出して二人に食はせ睦まじく話し暮らし夕暮かけて歸りたり。

「あゝ墓参りもしたし三郎や富次にも逢つたしどうも心持がよい。」と喜びながら、「之は餘り遅くなつた。」と急いで歸る道はたに年の頃五十二三とも見ゆる年より婆様が頻りと何か摘み居る故金次郎立止まりて聲を掛け、「婆様暮方に何をして居るの。餅草でも摘んで居るのかね。」と聞くと婆様は「どうしてくそんな氣樂な事では御座いません。之で以てね。御飯に交せて食

べるのです。」と力なげに云ふ。よくよく見れば、肉は瘦せこけて骨と皮許になり、齒は缺け落ちて口元しまらず、白髪交りの髪の毛を草の根を束ねたる如く、着物は着て居れど腰より上は垢付きて縞の黒白もなく、腰より下はさながらわかめを下けたるやうなり。

金次郎折から哀を催して、「なぜ若い人に摘ませないの。年寄の婆様に摘ませるとはあんまりひどいね。」と云ふと、婆様は「いや、私の家には若い者も何もなくて、たつた一人なのですよ。去年までは一人の息子がありまして、どうかかかろうか養ってくれましたがね、其息子が病氣で亡くなりましたしてからは杖に離れた盲目も同様、飲む事も食ふ事も出来ませんのもう死んでもよいと思ひます

けれども中々死にもしないで、かうやつて業晒をして居るのです。」と云ひ終りてほろ／＼と涙をこぼす。聞いて金次郎愈憐がり、「どうも慙然な婆様だな。」と貰ひ涙にくれけるがふと思ひついて懐より財布をとり出し、倒にして錢を出し、「あのね、婆様餘り不調法だがね。之でね。御肴でも買つて食べて下さい。ほんにちつと許して下さいよ。」と云ひながらうろ／＼する婆様の手に握らし、急いで家に歸りたり。

家には歸りたるが、どかくに婆様の姿目につらつきて離れず、かわいさの念止み難く、「あゝ、どうかしてあんな婆様を助けてやりたい者だ。あの婆様に限らず、随分此近所にはいろいろ難義な人が有るたらう。二親に死なれ

て獨遺された幼兒も有るたらうし。それから夫に死な
 れ澤山の子供を育てるに困る人なども有るたらうし。親
 に病氣になられて薬買ふ錢がないのに苦しんでる子供も
 有るたらう。あゝどうかしてそんな人達を助けてやり
 たい者だ。」と我が身の苦勞も打忘れて人の難儀を思ひ
 やる。ありがたくも愛さ心なり。
 さても金次郎一度かく思ひ込みしより暫も此事を忘れ
 ず人の遊ぶ時にも遊ぶず暇は有りても只は暮さず人の
 使に頼れては僅の賃錢を取り細綿ひ草鞋作りてはるれ
 を賣り代なきかくて得たる金をは一文たりとも用なき
 事に使はず得たる度毎に庄屋に持ち行き預け置き溜
 まりたる頃を計り受け取り來りては貧しき人々に施し

けり。
 されは施しを受けし人々は金次郎を神佛と有り難がり
 之を聞く人々も深く感心し共に施なすする人もありけ
 り。さすが吝嗇邪慳の萬兵衛さへうら耻しくなりて金
 次郎に優しくあたるのみならず共々貧しき人々を助け
 て喜ぶやうになりたり。されは金次郎金次郎と云ふ事
 はやうく村中に撒まりて若き者どもの手本となり一
 末頼母しい若者た」と寄るとさばると老人どもの噂な
 り。

十三 荒地を耕す。

さても金次郎年取るにつれつくづく思ふやう、「あゝ吾
 もはや二十以上とあつたのに何時までかうして伯父

様の御厄介になつて居る譯には行かない。なんとか一工夫して家に歸り、獨で働いて、獨で暮し、田地をも買つて元の我が家に立て直さなくてはならない。そして長々御世話になつた伯父様始め、いろいろ御厄介になつた親類縁者にも、それ／＼御禮をしなければならぬ。ぐづ／＼しては居られない。と云つて、なんとする方法もない。はて困つた者だ。」と日夜心を苦しめたり。いろいろと工夫したる末、「まあ家を興すには一生懸命働いて、そして出来るだけ儉約するより外はないのだが、さりとて體一家にはいつたからとてしやうがない。少しは錢と飯米とがなくてはならぬ。では先一錢と飯米とを溜る事としやう。」とさめたるが、「錢はいくらづ／＼

か溜るによいが飯米はさうしたらよからう。」と又も心を悩したり。時にふと心付きしは洪水のため、荒地となりて人も見棄てし所有る事なり。「さう／＼あれがよい。よしや荒地でも一生懸命になつて掘つたらよもや物實の取れぬ事はあるまい。さうた／＼あそこを一耕して苗を植ゑて見やう。」とそれより暇さへあれば、ほり耕し、やうやく二三畝歩の田を得しかば、金次郎小躍して打喜び、「金次郎様駄目たらうせ。」と人の云ふをば、「まあ植ゑて見せう。」とよき程に挨拶し、人の捨てたる苗を拾ひ、どにかくして植ゑつけたり。「まあ植ゑつけたから安心だ。さうかしてよく育つて

くれ、はよい。」と心密かに祈りつゝ、朝夕の暇々に草を
取り水を入れなごするに、中々によく育ちて秋になりて
は好まじき程によくみのりたり。
「よく出来ましたね金次郎様と」人に賞めらるゝより
も家を興す手始よしと愉快限りなく手に持つ鎌も躍る
やうの氣持しながら刈り取りてこき落とし扱となしたる
に一俵の俵には餘りたり。
金次郎は天に喜び地に喜び手の舞ひ足の踏むをも知ら
ぬ思なり。金次郎は之を始として、其翌年も翌々年も田
を取り擴げつゝ、植ゑしかば二三年の後には扱も溜りて
十俵餘となりたり。

十四 家を興す。

長らくの辛抱其甲斐ありて、數年の後には十俵餘の扱も
貯へ其間に錢も少々貯へしかば今は、「家を興すべき時
なり。」と思ひ立ち其旨伯父にも話して、歸り度き旨を願
ひたるに、伯父も喜びて承諾し、何かと世話をなし小者一
人に馬など牽かせて金次郎を出しやりたり。
金次郎伯父の家を辭し吾が家に歸りしに、有りし垣根は
なくなりて、名もなき雑草時を得顔に生ひ繁り狐狸の住
み荒しけん様も懐ひ遣られて坐哀れの催され、暫しは足
も進めかねしがさてあるべきにあらされば草踏み分け
てはいりたるに、井桁は朽ちて半分は井戸に陥り釣瓶は
なくなりて竿のみ残り。柱傾きて板戸などはづれ



たる所も有れば屋
 根の萱飛んで骨の
 表はれたる所も有



り。壁さへ所々落ちたれば、まして障子などの紙の残れ
るはなし。金次郎今更のやうに驚かれ暫しはほんやり
眺め居しが、漸く氣を取り直し自勵まして家にはいり、そ
ちこちと掃除なごして、先持ち來りし粗や夜具諸道具な
ご取り運びたり。日暮に小者をは返し獨火をたき湯な
んと沸して、伯父の家より持ち來れる夕飯を食ひ終り獨
ちくねんと火にあたり居るに、父の事母の事は、三郎
左衛門富次郎の事まで思ひ出でられ過ぎし昔の今眼の
前にある心地せられて、心細くも悲しけれど、又十年以上
人の家に厄介になり居りて、今吾が家に返りたるを思ひ
之より家をは興さん者と勇み立てば、愉快極りなく床に
入りても餘りの嬉しさに眠られず、「明日はあゝして明

後日はかうして、來年になつたらばかう、それからあゝ。
ど後々の工夫に思を凝して一夜を明したり。
翌日より突張棒をかけた傾き掛れる柱を支え、萱を集
めて家根を葺き、土を涅りて壁を塗り、草も抜き取り垣も
結ひ障子なども張り、さて神棚を淨めて水をさゝけ、蒸し
く拜み、次に佛壇を掃除して二親の位牌を据え、花を捧げ
線香を燈して、生きたる人に物云ふ如く、家に歸りたる旨
を告げける心、若二親の知るあらば、何程か嬉しからん。
之にて家も大方片付きたれば、「いざ之より一辛棒。」と
旦には星を戴いて出で、夕には月を踏んで歸りつゝ、家の
廻の畑を始として人の田畑も耕してやり、暇には薪を採
り、繩を緇ひ草鞋を作りなごして、數年一日の如く立ち働

きたり。
 勿論其間は儉約の上にも儉約をなし飯には何時もいろ
 いろのかてを交へて食ひ汁は二三日に一度と定め肴な
 どは殆食はぬ程にして一生懸命錢米を貯ひ、やうやく溜
 れば田を買ひ畑を買ひなごして一文たりとも用なき事
 には使はざりしかば、やがての程に田も畑も祖父の代に
 優るとも劣る事なき程に至れり。
 願れば田もなく畑もなく貧窮極る家に育ち十四の年に
 父に死なれ十六の年に母に死なれ遺る兄弟とも手を分
 ちなつかしき吾が家も後にして伯父の家に世話になり
 しも十年餘り並々ならぬ憂き悲みに心を惱まし身を苦
 しめたる事一方ならぬと父を懐ひ母を慕ふ一念凝り固

りて家を興さでは止まじの決心金鐵の如く堪え難さを
 堪え勉め難さを勉め十年以來の志を貫いて、こゝにめで
 たく廢れし家を興したる金次郎の心如何に嬉しかりけ
 ん。思ひ遣るさへ心地よき事ごもなり。

十五、服部家の興復を頼まる。

金次郎のかく家を興したるを見て親類縁者共「妻を持
 て。」と勸めて止まざりしかば「また早しまた早し。」と
 て辭みつゝ猶も勵みて一意専心家事に勉めたりしが數
 年の後親類縁者も頻りに勸めて止まざるより遂に妻を
 娶りたり。金次郎が辛苦艱難の中にありながら忍耐刻
 苦して遂に廢れし家を興したる事誰云ふとなく傳りて
 小田原領内一般の評判となり今は誰一人知らぬ者なき

に至れり。時に小田原侯の家老に服部十郎兵衛と云ふ侍ありて世祿千三百石を食み代々重き役を勉むる家柄なれば世の尊敬も厚かりしがどかく驕りに長じて儉約する事を知らず取り入る祿も年々不足を告げけるより其度毎に借りたる金の今は積りて千兩程になり返さんにも手たてなく返さねば役も勉めかぬる仕合となりくらしむき日増に苦しうなりて如何にもせんやうなく哀只手を束ねて倒るゝを待つ有様とはなれり。親しく服部家に入出入する何某此有様を見て甚氣の毒に思ひ如何にもして「身上を立て直してやらばや。」といろく案じ煩ひたる末「あの金次郎を頼んたら可から

ん。」と思ひ或時服部に至りて云ふやう「柏山村の金次郎と申すは艱難辛苦の間に人となり一俵の糶を本として遂には廢れし家をも興したる程の人なれば御家の御興復を金次郎に御頼みなされては如何で御座りまするか金次郎は至りて情深くて人を慈む心篤いと聞きました彼は辱く感じまして身に代へて家を興す事に勉むるに相違御座りませぬ。」服部氏聞いて大に喜び早速人を金次郎の家に遣して叮嚀に頼み入りたり。御座りまする。私はずまらぬ水呑百姓手足を力に働いてどうにかうにか家をば興しましたれど物の道理も辨へず智慧もない私如きどうしてく御家老様の御身

上などを直されるもので御座りますか。仰の趣は辱な
き次第で御座りますれど之は御断りを申します。」と固
く辭退して如何に云ふとも受け引かされは止むなく其
人は歸りたり。

服部氏此由聞かれて益金次郎の人物の頼母しく思はれ
如何にもして頼みたき者と再三再四人を遣して頼み入
りたれども金次郎は更に動く氣色もなかりけり。

服部氏大に困り今は倒るゝを待つ許なる事どもなご細
かに手紙に認め餘義なく頼み入りたれば元來情深き金
次郎の事とて大に心を動かされ「こんなつまらぬ分際
の者に、かほごまで打明けて家の大事を頼まるゝに強ひ
て辭むは濟まぬ事だ。自分はおやうな大事を頼まるゝ

力有りとも思はないけれども驚るゝまでやる覺悟が有
つたなら成らぬ事はよもあるまい。よし一遣つて上げ
やう。」と屹度思案を定め妻を呼び寄せて、「服部様より
御頼みの有る事は御前が知つて居る通だが餘りに御辭
退申すも濟まぬ故今度は愈參る事と覺悟した。依つて
は短くも二三年長ければ五六年家に歸る事は出来まい
家の留守居は宜しく頼ぞ」と云へば妻も金次郎の決心
の程顔に表はるゝを見て異議なく承諾し、「家の事はど
うにかどりしまり致して留守を致しますから御心配な
さらすと切角御勤なさいと」はつきり云ひしかば金次
郎も大に勇み立ち明日とも云はず即日服部家に至りた
り。

十六 服部家を再興す。

金次郎服部家に至り、直ちに服部氏に逢うて、「之より家事一切を私に御委せ下されて、少しも御口入なさるまじきや。さらば一身に御引受致して再興を計り申しませう。」と憶する氣色もなく云ひ出でたるに、服部氏も大に喜ばれ、「うれしう、吾が望む所なれ。何事もろなたが云はるゝまゝになるべければ、再興の事單に頼み入りますると云ふ」さらばとて金次郎改まりて云ふやう。「御家のかゝる有様に立ち至りましたのは、つまる所分に越えて驕りをなされたからと存じます。それ故年々祿に不足を生じて借金が嵩まるやうになつたのであります。それで先家を立て直す第一の工夫は、借金を返す事であ

ります。其借金を返すには、餘金がなくしてはなりません。餘金を出すには、儉約に儉約するより外はありません。依つて以來食物は一汁一菜と定め、着物は木綿と限り、用なき事には一文も使はぬとかう云ふ事に致さなくてはなりません。此儀御承諾下されますか。」と憚る所もなく陳べたるに、服部氏は面目なげに「最早委せたからは何も善悪は云はぬ。如何様にも宜しく頼む。」と快く承諾せられしかば、金次郎有り難き由申し述べ、其處を退りて勝手に下り下女下男共を集め、當家の貧窮になりたる次第と、自分今度其再興を頼まれたる由を告げて、さて云ふやう、「苟くも主家の再興を思はゞ御前等今後萬事己が指圖に従て異存有つてはならない。若し快くない

思ふ者は早速暇をやるにより遠慮なく申し出よ。」とま
つと申し渡ししたるに、下女下男一同口を揃へ、「何も異存
は御座りません。あなた様が御指圖に従て共々當家の
再興を計ります事は本望に御座ります。」と畏りぬ。
さても金次郎は金を貸したる者を呼び質を明して五年
間が猶豫を頼み次に一ケ年分の入り高と入費とを計算
し、一ケ年の入り高より餘程少き活計を立て、餘る金をは
貯へつゝ朝は早くより夜は遅くまで皆の人に先立ちて
家事を勉めしかば主人夫妻は勿論の事下女下男の輩に
至るまで我劣らじと勉め勵み五年の後には千兩に餘る
借債を悉く返し終りたる上猶三百兩の金を餘せり。
金次郎は此三百兩を主人の前にさし出し。「借債は皆返

して猶是文が残りました。此中百兩は服部様が納め置
きになつて何か非常の事が有る時御使ひなさい、百兩
は奥様の者として御仕舞置きなされて、何か不時の用に
御使ひなされ、残る百兩は御隨意に遊ばされよ。まあど
うにか御家の御勝手向も立ち直りましたので、私も大に
満足で御座ります。之と申すも畢竟服部様が不安心
とも思召されず萬事私に御委せ下したゝめで御座りま
する、奥様も長らくの御辛抱御苦勞の程御察し申しま
する、之からは御安心なさりませ、と申して分に過ぎ
た御生活をなされては、又もや元の様に御苦しみなさる許

随分と御油
断なく家を
治めなさる
事を御願ひ
申します、
御當家の祿
は千三百石
其内千石に
て家の活計
を立て、残る



三百石は分
外と見て貯
へ置きて、不
時の用に充
てなさい。
さらには決し
て再御困り
になるやう
の事は有り
ますまい、



之れで御頼みの事も仕果ふせましたから私は御暇を願ひます、」と云へば服部夫妻涙を浮べ、「家も棄て身も願みないで、五年間一日の如く心を碎き手足を勞して、倒れ掛つた吾が家を興して下した、そなたの御恩は死ぬとも忘れませぬ、有り難く肝に刻んで忘れませぬ、何か御恩に報えたけれども、只今の所は致方が御座らぬ、私夫妻に御出しになつた二百兩は切角の御恩召なれば此儘御受取致しませう、せめては残る二百兩許はそなたが納め下されよ、」と云ふ、金次郎「さらば頂戴いたしませう、」とて百兩の金を懐にして勝手に下り下女下男

を集めて、御前方が長い間巳の指圖に従て辛抱してくれた甲斐ありて、今は見る通に當家の御活計向も確と立ち直つた、御主人巳の心を御賞めなして百兩の金を下されたが、固より御金を戴く爲に來た巳ではないから、之は御前等に分けてくれん、此金は己がくれるのではなくて御主人から下した者だから、其積にて猶此後ともまめしく働くべし、」とて百兩の金を分ち與へ自分は一文も身に付けず、其儘服部を出しかば、下女下男は神か佛かと許有り難がり、出で行く金次郎の後姿を拜む者もありけり。

十七、櫻町の興復を命せらる。

金次郎服部家を辭して家に歸りしより日々耕作を事と

しひたすら家事を勤めて、又餘念もなかりけり。
 時の小田原藩主大久保侯は其頃幕府の執政者として殆
 飛ぶ鳥も落ちん許の勢なりしが至りて賢明の君なりけ
 れば早くも金次郎が人物技倆の並々ならぬを察し、擧げ
 用ゐて國政にたづさはらせばやと思はれて、重臣に此事
 を計らはれけるに、重臣共、「一農民を擧げて士分に取り
 立て、其上國政にまでたづさはらせ申す事は前例も之な
 く、人の服する事も如何の者にや」と申し上げしかば、侯
 は己むなく思ひ止まりたり。
 時に大久保侯の分家宇津氏の領地下野の國芳賀郡の櫻
 町は元來瘦土地にて民の風俗も宜しからぬ所なりしに、
 其處を治むる役人共を治むるに其道を得ざりしかば、民

心愈亂れ、土地益々荒れて、前には四百五十餘ありし戸數
 の今は僅かに百四五十となり、四千俵の年貢を納めし者
 今は僅かに八百俵となれり、大久保侯大に之を憂へ、少
 からぬ資金を投じ、交々役人を遣りて興復を計られしも、
 更に其効なかりき、
 侯密かに思ふやう、「彼の櫻町の興復の事を二宮に命じ
 たら成就するに違ない、其櫻町の興復を成就した曉に
 彼を擧げ用ゐたなら異存を申す者よもあるまい」と小
 膝を打て喜ばれ、早速人を二宮の家に遣りて、此事を命じ
 たるに、二宮は、「私の力に及ばぬ事なれば」とて辭退し
 たり。此由聞かれて、益々二宮を信せられ、命を下して止
 まざる事三年に及べり。

金次郎思ふに、「とても吾が力に及ばぬ事には有れど、君がかくまで懇に命せらるゝ上は、最早辭むに由なし、今君の命を受け引きて櫻町に趣かば折角興したる家も廢るゝであらうが、君への忠義を思へば願ふるに違がない」と覺悟して、獨先櫻町に行きて、具に土地の有様を見分し、其廢れし所以を考へ、猶興復の方法までも立て、侯に言上し、始めて櫻町興復の事を引き受けたり。

是に於て金次郎妻にも其事を云ひ聞かせ、家財道具は勿論、田畑までも賣り拂ひて、其金を懐にし、今年三歳になる一子彌太郎を引き連れ、妻諸共久しく住み慣れし故郷を後になし、遙々野州さして下りたり。

やがて金次郎櫻町に着きて、其處の陣屋に入り、破れたる

壁も繕はず、傾きかゝれる柱も其儘にして、身には手織木綿の衣服を着、冷飯を食ひ、生味噌を嘗め、朝は日の出と共に出て、夜に入りて歸りつゝ、荒蕪開拓の事を教へ勤むる者を譽め、怠る者を勵まし、善人を賞し、悪人を諭し、ひたすら興復を計られしが、元來怠惰に慣れ、狡猾をのみ事としたる人民共なれば、とかく金次郎の命に従はぬのみか、やゝもすれば、金次郎の爲す事を妨げなぞするに、金次郎に屬たる役人共之を鎮めんとはせ、て反て此等の悪者共を煽ぎ立て、はては金次郎を大久保侯に讒するに至れり。

されど金次郎は少しも恨み怒る事なく、反て己が誠の足らぬを耻ぢ、下總の國成田山に行き、三七二十一日間の斷食をなして、天地神明に祈誓を籠め、益々奮て興復の事に

從ひ東西に奔走して荒地を拓き水を通じ家なき者には
 家を作り與へ衣食なき者には衣食を給しつゝ降り來る
 千辛萬苦物の數ともせで我を忘れて勵み勉めしかば人
 民も漸く其誠心に動かされ怠惰なる者も次第に勤勉と
 なり狡猾なる者も次第に正直に反りしかば荒地も次第
 に耕されて見事なる田畑となり破れたる家も繕はれ壞
 れし路も修められしかば領内頓に面目を革めたり。
 天保七年には大饑饉ありて諸國の民餓死する者其數を
 知らず至る所慘狀を極めしが獨櫻町の人民のみは金次
 郎の教に従ひて兼て貯へ置ける稗を食して一人も餓死
 する者なかりしかば櫻町の人民金次郎を信する事益々
 篤く何事にも其教を守り其命に従ひしかば數年ならず

して櫻町全興復せり
 十八、烏山藩及細川藩の衰頽を興復す。
 金次郎未全櫻町を興復せざる中より其人物と技倆とは
 早くも他藩に知られ他藩より來りて衰頽を興復する方
 法を請ふ者極めて多かりき。
 其頃野州烏山の城主大久保侯の領地も民の風俗甚亂れ
 年々荒地のみ増り行きて如何にもせんやうなかりし
 所に天保七年の饑饉に逢ひ上下の困難云ふべからざる
 有様に陥りぬ。時に大久保侯の菩提寺の和尚に圓應と
 云ふ者あり。兼て荒地を拓き窮民を救ひ來りしが今は
 力叶はなくなり家老の菅谷と相談し二宮金次郎に急を
 救ふ方法を請はんとて櫻町に來りたり。

さても圓應櫻町に來り願のあらましを陳べて金次郎に
面會したき旨申し入れたるに金次郎は、「忙はしければ
とて斷りぬ然るに圓應「吾先生に逢はぬ中は死ぬとて
も還らず」とて翌朝まて門前に坐り居たり、金次郎之
を聞いて以の外に怒り圓應を引き入れて云ふやう
を治め民を安んずるは是君の道で有つて法師など
の爲すべし事をは打棄て、敢て君の爲すべき事を爲さんとす
る、不届千萬なり」と叱りつけしに圓應も理に伏して
歸りたり。
菅谷は之を聞いて益々二宮の頼母しき人物なるを感じ、
君侯にも言上し、急ぎ櫻町に行きて金次郎に面會し君侯

の直書を出してひたすら頼み入りたれば金次郎も餘儀
なく承諾し猶小田原侯の許しをも得て先盛に米粟を烏
山に送りて饑に迫れる民を救はしめ續いて勤儉の要道
を説き興復の方法を授けたり。烏山の君臣心を二にし
てひたすら其致を守り其仕法を施したればかくまで衰
頹したる烏山領もやがて興復の運にぞ向ひける。
此頃細川藩も困窮年久しく負債は積んで山の如くにな
り、年貢は納らず上下共に救ふべからざる困難に陥りた
り、細川侯は養君辰十郎君大に之を憂へ密かに醫者中
村玄順を櫻町に遣して救濟の道を請はしめたり。
金次郎詳かに細川家の近状を聞き了り、さていふやう、一
凡一藩の貧困に陥るは分度を立てざる故なり。苟くも

分度さへ立てば容易に貧困に陥る憂なし。分度とは外
の事にあらず一ヶ年の収入を計算し其内にて支出をな
す事を云ふなり。しかし年には豊凶ありて一ヶ年の収
入のみ計りては確かなる分度立ち難ければ少くも十年
間の収入を計算し其平均を採りて定めされば宜しから
ず。某今細川家の分度を立て申さん。とて細川家十年
間の年貢の帳簿を持ち來らしめ其平均を採り出入の度
を定め猶國を治め民を安んずる方策を立て、細川家に
呈したり。
細川侯父子大に喜ばれ小田原に申し入れて其承諾を得
更に改めて救済の事を金次郎に依頼したり。金次郎是
に於て弟子大島某なる者を細川家の領内に遣し其仕法

を行はしめたるに民皆進んで農事を勤め分度外の収入
さへ有る様になりて細川家にては多少負債を返し得る
事を得たり。

十九 小田原領内救済興復の事を命せらる。

天保七年の饑饉には小田原領内の人民も殊の外困窮し
ければ大久保侯には救済の事を金次郎に命せんとて急
ぎ使を櫻町に遣して出府を命じたり。然るに金次郎一
此地の人民饑に迫りて某るを救ふに忙はしく夜晝安
心もなき所なれば參るべき様もなし。御用ならば君侯
自御出であるべし。とて上る氣色もなし。使者歸りて
此旨を君に申し上げしに君は何程か怒らるゝならんと
思の外、「我過つた。金次郎の申す所道理至極た。もう

一度下りて云へ、小田原領民の命は旦夕に迫り居る。就ては早々此等饑に迫り居る民を救ふて我が心を安んせよと云へ。」とて再使者を櫻町に遣したり。

金次郎命を承りて、「其儀ならば早々此地の處置をなし、處置の終り次第出府致すべし。」と御請を致し急ぎ其地の處置をなし取る者も取り敢へず江戸に上りたり。

折ふし君侯には病の床に臥し居られけるが、金次郎來れりと聞かれ、殊の外喜ばれ、苦しき中にも頭を擡げ、「金次郎が今日までの功勞は賞せずには措かれぬ。祿を與へて用人格とせよ。猶麻上下一通を下せ。」と仰せられしかば、役人かこまりて、先麻上下を賜へたるに、金次郎は顔色を變へ、「之は何たる賜物ぞや、一刻も早く民を救

ふ手たてを問はれ、米粟でも下さるべき所に、禮服の賜物之はさしむき私に用もなく、民の饑を救ふ料とも爲し難ければ、之は謹んで御返し申す。」とて受けず、格を上せられ、祿を賜はる由聞きては、「早く小田原に下れ、ところ仰せらるべき所に、こは又何事を我に祿を賜へたりとて、飢えたる民の腹を充たすべき様もなきに。」と憚る所もなく、公言しければ、君侯聞かれて、「金次郎の云ふ所、一々道理に叶ひて、加賀守赤面の外はない。禮服を賜ふにも及ばぬ、祿を與ふる事も止め、致せ、其代り、金次郎に小田原の米倉を開く事を許す、之は民を救ふ用に下す。」とて、手元金千兩を金次郎に下されたり。金次郎大に喜び、即日小田原さして江戸を出發したり。

さて金次郎小田原に下り君命を傳へて倉を開かんと申し入れたるに國元の役人共「表立ちて仰なき中は開き難し。」と拒みければ、金次郎眼を瞋らし聲を荒らけ、「よし君命なくとも倉を開いて民を賑はし事終りて咎あらば已一人責を引いて罪に服すが眞の臣たる道なるべしに、何事を後の一人の咎を恐れて現在飢に迫れる幾萬の人民を見殺すとは、苟くも人心有る者の忍び得る事か。どうしても拒まるゝならば、各々方も之より斷食し給へ。某も斷食致し共に君命を待つて御座らう。」と雷の落るが如く説きつけしかば、役人共も理に伏し云ふがまにまに倉を開きたり。

是に於て金次郎盛に米粟を諸方に運送し、又千兩の金を

分ち與へ、自草鞋を穿きて、日夜東西に奔走し、饑餓を救ひしかば、爲めに死を免れし者、小田原領駿河伊豆相摸三ヶ國に跨る郡々村々四萬三百九十有餘人の多さに及べり。之より先大久保候には、金次郎小田原に下る間もなく逝去せられけるが、其時江戸の重臣共、「我が死後は金次郎を重く用ゐて一藩の興復を委せ、共々國を治めて民を安んぜよ。」と遺言せられたり。

是に於て重臣等先君の遺命を奉じて、小田原土地興復の事を金次郎に命じたり。其時金次郎重臣等に向て、「先一藩の分度を定めされば、土地興復すとも其効は御座りませぬ。」と申し立てたれど、重臣等とかくに云ひ紛らし、て分度を立つる事をせず、只に土地を興復せよとのみ云

ふ。金次郎甲斐なき事とは知りながら先君の遺命には背き難くして暫く小田原に滞在して土地の興復に従事したり。

只さへ父母の如く慕へる金次郎の今や懇に土地興復の方法を教へ親切に身を修め家を立つる事を諭さるゝなれば小田原領民はさながら早に雨を得し心地水の低さに附くが如く忽其風に化し競うて其仕法を行ひしかば領内漸く興復の運に向ひたり。

さて其後金次郎は頻りに分度を確立せん事を其向の役人に説き勧めしも更に願みざりしかばさすが忍耐強き金次郎も最早堪え切れず一日飄然として櫻町に歸りたり。

事譯知らぬ人民共は金次郎に歸られて恰暗夜に燈を失ひたる思暫は五里霧中に彷徨ひしが是皆吾々が誠の足らぬ故と寄々談合し一方には總代を櫻町に遣りてひたすら興復の事を歎願し一方には各私財を擲て興復の費用に充て其教を守り居たり。

情深き金次郎如何で聞き過すべき。あはれ人民はかくまで吾を慕へるか。うれに棄つるは眞に罪深し。役人はともあれ。吾は吾が事を行はん。と再小田原に行き前にも増して勉め勵みしかば領内大に面目を革めたり。

二十、幕府に用ゐらる。

金次郎の人物技倆漸く幕府に知られ天保十三年金次郎年五十六歳の時幕府に召し出され普請役の格に列せら

中絶し民も向ふ所に迷ふべく先君の御心にも背く次第
 なれば大久保侯より宜しく御とりなしありて此度の仰
 御取消下さるやう幕府に願はれたしと小田原の役人ま
 で申し陳べたるが大久保侯も尤と思召されたとひ幕府
 の役人となりても暇を以て小田原興復の監督をなし得
 る事に幕府の方を取計らはれしかば金次郎今は辭ま
 よしもなくて幕府の役人とはなりにけり。
 此年下総の國印幡沼開鑿の法につき其見分を命せられ
 親しく見分を遂げて開鑿意見書を呈せしかども不幸に
 して用ゐられざりけり。
 此頃奥州相馬侯の中村領非常に荒廢して藩を維持する

事さへむつかしき程になりけるが忠臣草野正辰池田胤
 直の兩人如何にもして衰頽を挽き回さんと欲し多年苦
 心して一藩の議を決し君にも説き勧め茲に回復の方法
 を金次郎に請えぬ。
 金次郎初の中は中々に承知せざりしかど草野池田兩人
 が忠誠の篤さに感じ相馬侯の懇請も辭み難く幕府の許
 を得て漸く其頼みを受け相馬家百八十年間の年貢を取
 調べ深く慮り遠く考へ日夜苦心に苦心を重ね數月にし
 て遂に未來六十年間の長計を立て猶其方法を實施する
 心得なきを事を細かに書き記して相馬侯に呈したり。
 之を見て相馬侯を初め藩臣一同の喜び斜ならず早速一
 二村に施し試たるに成績頗宜しかりしかば續いて領内

一般に施したるに、數年ならずして其効著しく、産穀も次第に豊かになり、年貢の如きも期に先ちて納むる勢となり、相馬侯漸く衰頽を挽回して、上下心を安んずるを得たり。

さるにても、小田原にては、一旦金次郎が去りしより、興復の事も中止の姿となり、此末いかなるらんと安き心もなかりしに、小人の愚さ、國元の家老は、無謀にも二宮の仕法を廢し、あまつさへ領民に嚴命して、二宮と交通する事をさへ止めしかば、興復の仕法全廢れ、二宮が多年の苦心も水の泡となり、民皆東の空を望んで歎き悲む許なり。

金次郎遙かに之を聞き、天を仰いで歎息し、一日小田原先君の墓に詣で、其墓前に跪き、掌を合せ涙を流して、暫し

時刻を移されけるが、其時供せし從者共まで、金次郎の誠に感動し、一人も頭を擧げ得ざりきとぞなん。

之より先、弘化元年に日光神領、荒蕪開拓の調査を命さる。金次郎是に於て、廣く思ひ深く考へ、夜に日を繼いで勉め勵み、三年の長日月を閲し、開拓方法六十卷を作りて之を奉りたるが、不幸にも時の執政の更るに因りて、實行する運に至らざりき。

其後、金次郎は奥州小名濱、野洲、眞岡、同州東郷、三縣令の屬吏とせられて、野州、眞岡の陣屋に至りたり。金次郎最早一屬吏となりたる事として、思ふ事も行はれず、言ふ事も用ゐられぬ、加ふるに腹黒さ上役人よりは尋常人の堪えぬ程の取扱を受けたるが、何事も天なり命なりと覺悟して

毫も怨み憤る事なく、見るもいふせきあはらやに起臥
しして、少しも氣に掛けず、及ぶ丈の力を盡して、土地の興
復に勉めたり。

天運循環り環りて、嘉永六年に至り、こゝに金次郎日光神領
荒蕪開拓の事を命せらる。偶病に罹りけるが稍快くな
るや、否日光に至り、病後の疲勞も物とせず、六十以上の老
体を以て、日々山を越え谷を渡り、至る所土地の肥瘠を見
民の貧富を量り、人情の善悪を察し、意見を定めて土地の

奉行と談合して、事業に着手せり。

金次郎如何に心は猛くとも、病後間もなく餘りに心を勞
し、老体をも顧みず、身を粉にして奔走じたる事なれば、心
身共に弱り果て、安政三年十月二十日遂に歸らぬ旅路

に趣きぬ。時に年七十一、骸は今市驛の如來寺に葬りぬ。
金次郎の訃音一度世に傳るや、其力に據りて衰頹を挽
回したる諸侯は、さながら天日を失へる如くに悼み惜み
其仕法に生き、其慈に沐したる處在幾多の人民は、恰父母
を失へる如くに嘆き悲みたり。

二十一、死後の譽。

金次郎生涯の事業は大なりと云ふにもあらず、又高しと
云ふにもあらず、從て人をして面白し心地よしと叫はし
むる程の事なしと雖、名利を欲せず、富貴を願はず、一意專
心土地を興し、民を救ひて倦まず、事に當りて難きを辭せ
ず、堅忍不拔斃れて後止むの至誠に至りては、眞に類稀な
る人物と云ふべきなり。



後世曾金次郎の恩恵に浴したる者の子孫及其徳を慕へ
 る人々社を相州小田原に建て二宮報徳神社と祀りたり。
 金次郎生涯の事績を記したる報徳記は辱くも
 天皇陛下乙夜の覽に供せられ猶宮内省に勅して板刻せ
 しめ給へり。
 明治十三年に至りては朝廷金次郎の遺族に金を賜ひ二
 十四年に至りては金次郎に正四位を贈らせ給へり。

二 宮 尊 徳 終

明治卅四年五月十六日印刷
明治卅四年五月廿二日發行



著作兼
發行者

大阪市東區備後町四丁目七十八番屋敷
吉岡平助

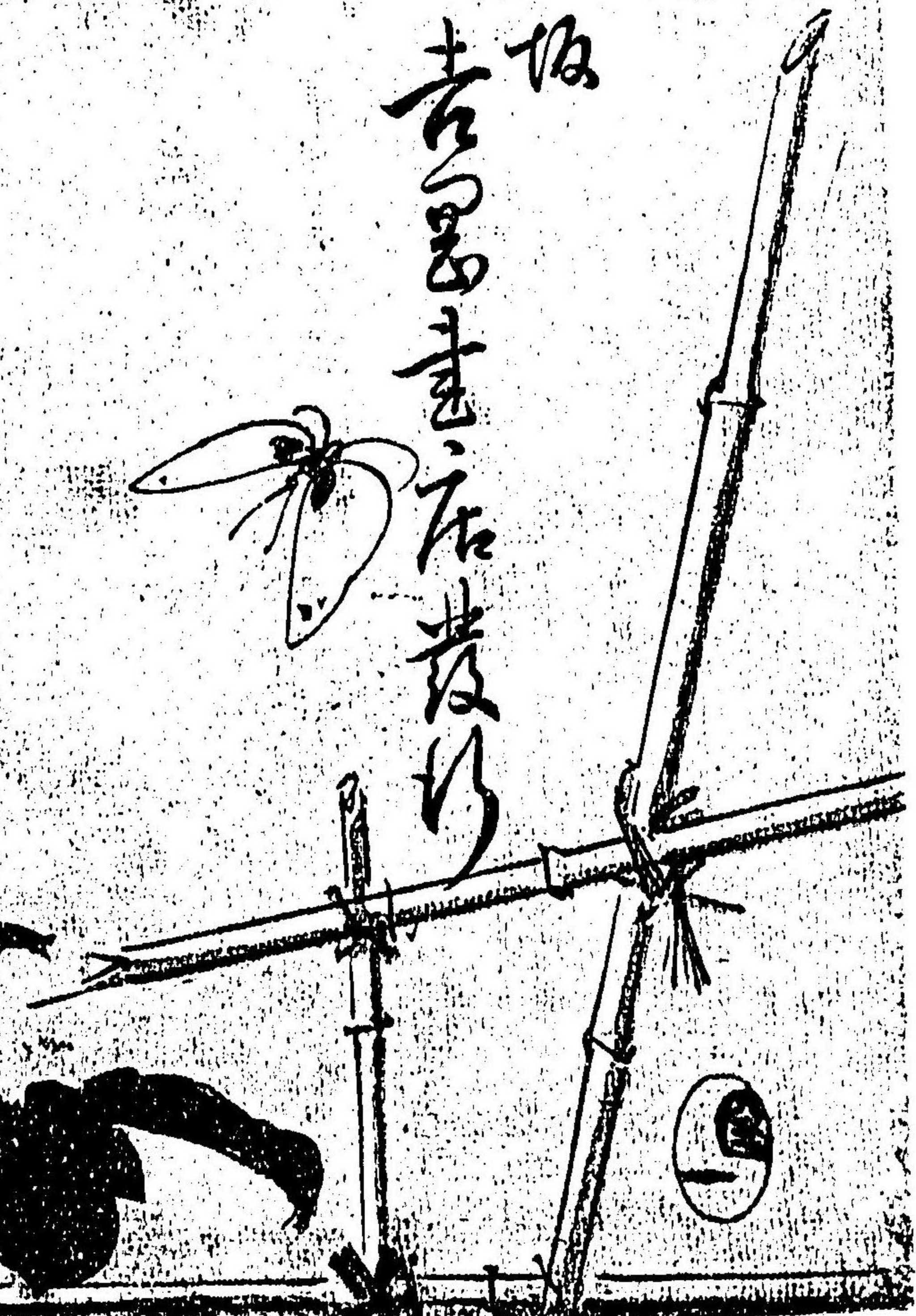
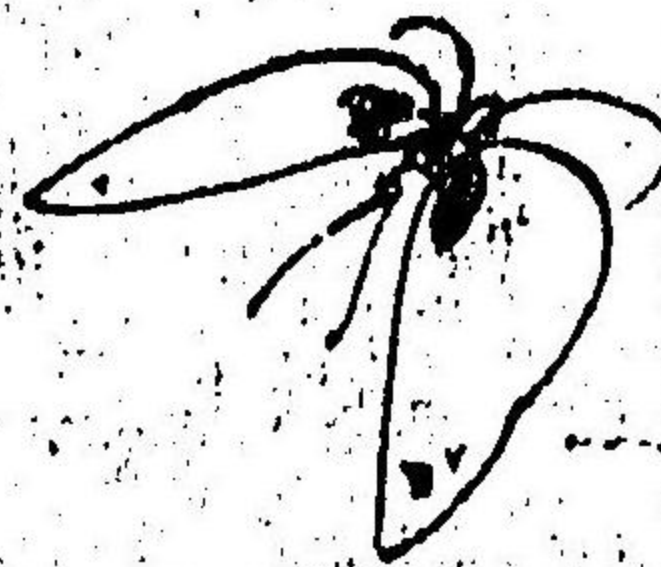
印刷者
梶原謙吉

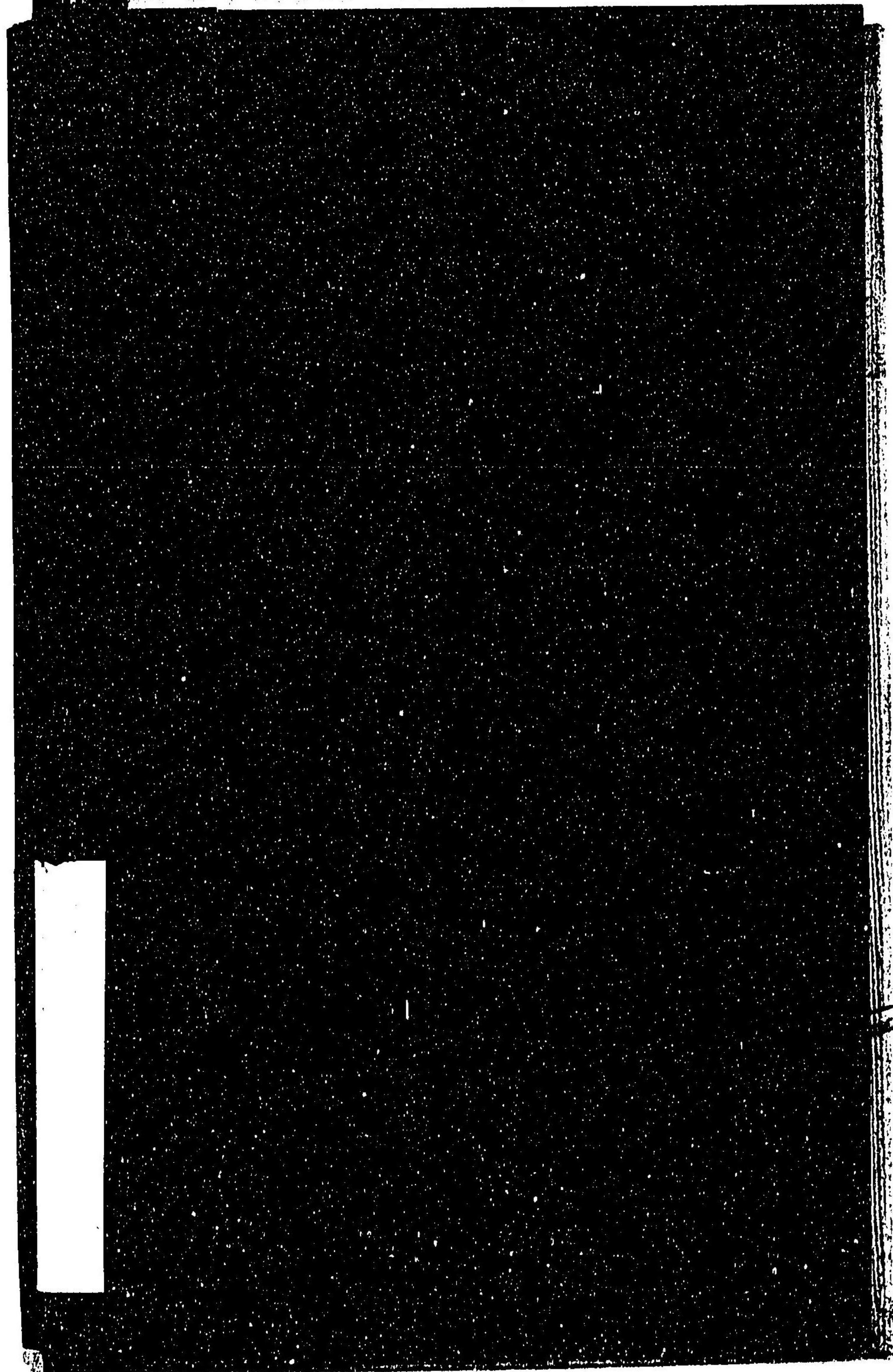
發兌
書肆

神戶市元町通五丁目 吉岡支店
大阪市東區備後町四丁目 盛文館
京都市二條河原町 寶文館
筑前博多中島町 博文社

大坂

吉野書局發行





特49

869

家庭読本 1

二宮尊徳

国立国会図書館

011847-000-4

特49-869

二宮尊徳

青葉山人/著

M34

AAF-0125

